

イタリア文化事典

丸善出版

珊瑚とカメオ

ナポリから海沿いに南へ下ること、約 15 km。ヴェスヴィオ火山とナポリ湾に挟まれた人口 9 万人ほどの小さな港町トッレ・デル・グレコは、世界の珊瑚とシェルカメオ産業における覇権を約 2 世紀にわたり独占し続け、今日にいたっている。

●珊瑚フィーバー 1805 年両シチリア王国のトッレ・デル・グレコに、王立珊瑚加工工場が設立された。創業者は、マルセイユ出身のポール・バルテルミー・マルタン。北アフリカ近海を中心に地中海を駆け巡る命知らずの珊瑚漁師の町として、すでに 15 世紀なかばにはその名を馳せていたトッレ・デル・グレコだが、加工の技術をもたなかったばかりに、みずからの町での水揚げがかなわず、他の町（リヴォルノ、ジェノヴァ、マルセイユなど）で二束三文でたたき売らざるを得ないという立場に甘んじ続けてきた。マルタンは、この町の貴重な珊瑚原木の豊かさと関連産業の欠如に、ビジネスチャンスを感じつけてやってきたのである。

当初彼の工場での加工は研磨に限られていたが、研磨に適さない部分をも生かす手段としてマルタンが可能性を見出したのは、彫刻であった。折しも、ナポレオンにより新古典主義がヨーロッパにおける絶対的なモードとなり、ギリシャ・ローマ期にその美が追求されたカメオジュエリーが一躍注目を浴びる存在となっていたが、フランス出身のマルタンはこの流行を利用することを考えていた。早速ローマから招へいされた 3 人の熟練ストーンカメオ職人は、珊瑚の性質を学ぶと、短期間でこれに適したカメオ彫刻技術を完成させる。その成果は、この工場製の作品が、1811 年ナポリ国産製品博覧会で金メダルに輝いたことでも証明される。

企業家精神旺盛な客神の手により、ここに漁・加工・流通まで、珊瑚に関するハイレベルの全産業システムが、トッレ・デル・グレコに整った。

1875 年、シチリア島シャッカの 30 マイル沖で、巨大な珊瑚曾根が発見された結果、イタリア船籍の珊瑚水揚げ量は、同年の 360 t から翌年一気に 4492.5 t に跳ねあがった。「シャッカ珊瑚」フィーバーの始まりである。78 年、80 年にも同海域で同様の曾根が見つかり、すでに地中海珊瑚産業を握っていたトッレ・デル・グレコには、一獲千金を夢見たにわか珊瑚漁師・職人・商人が続々誕生する。しかし、それまでの水揚げ量の常識を逸脱した大量の原料流入により、原木価格が 1872~79 年の 1 kg 350 リラから 80 年には 40 リラ、84 年には 16 リラと暴落した。さらに 70 年代の不況、ヨーロッパ、アメリカの関税引き上げが重なり、海のゴールドラッシュは恐慌へと一転し、関係者の間では倒産が相次いだ。また、市場の混乱により、マルタンが確立に努めた珊瑚のハイジュエリーとしての地位、そし

てこのブームにどこよりも踊ったトッレ・デル・グレコの業界内の権威を疑問視する動きが出てきた。

この貴重な海の宝石が被ったかつてないイメージダウンに対し、品質向上による打開策を模索していたトッレ・デル・グレコの業者と、1861年の国家統一後南イタリアの近代・産業化をめざしていた国の方針が合致した結果、1879年、国立職業訓練機関としてこの町に珊瑚加工学校が設立される。

地元と国の期待を担った学校が、その難しい使命を果たすべくさまざまな試みを繰り返していた1880年代なかば、遠い太平洋、日本近海で新種の珊瑚が水揚げされたとの噂を、この町の船乗りがとあるアジアの港で耳にする。何でも、

太い幹と小枝が巨大な扇をなし、見たこともない美しい色のバリエーションは限りないとか、珊瑚が地中海だけに与えられた恵みであるとされてきたそれまでの歴史を覆すこのニュース、事実であれば珊瑚、ひいてはその雄であるトッレ・デル・グレコのあり方の根本的変化は避けられない。シャッカ珊瑚の後遺症を抱えながらも、その真偽をただす必要に駆られた業者が、40~60日の長旅の末たどりついた日本で見たものは、それまでの珊瑚の常識を一蹴する光景だった。まずは色の幅である。サーモンピンクを基調とする地中海のそれに対し、白・赤・モモの3種が存在し、かつおのおのグラデーションの幅の豊かなこと。また、手のひら大の地中海珊瑚に対し、こちらは時に半径が1.5mにも及ぶ優雅な扇形である。

試験加工の結果、その硬さと太さは、地中海珊瑚では不可能だった緻密な彫刻を可能とすること、また、数倍大きくより滑らかな玉は、その研磨製品も洗練と貫禄でハイジュエリーとしての珊瑚を的確に体現し得るものであることが判明した。事実、エンジェル・スキンとよばれるパールピンクは、ヨーロッパやアメリカの富裕層の女性を一瞬でとりこにした。

シャッカ珊瑚の痛手から回復しきれず、新種の出現にも手をこまねいているほかの地中海の港町をしり目に、トッレ・デル・グレコの資力のある業者たちは、生き残りをかけて日本珊瑚輸入を開始した。その結果、トータルな珊瑚産業システム形成の出発点となった漁は、徐々に輸入に移行する。しかし単独で輸入・製品化した努力が報われ、この町の業界における覇権は一層確立された。その後、原料における太平洋珊瑚の割合は上昇し、日本のみならず台湾や中国が珊瑚産業に名乗りをあげるが、絶対的な加工技術と販売網を培い続けるトッレ・デル・グ



カルロ・パルラーティ作
《クロノス（賢者と子供）》

レコの地位は、不動のまま現在にいたっている。

●**珊瑚加工学校のいま** 現在の校名は、トッレ・デル・グレコ芸術専門学校という。彫刻に加え、1965年より貴金属コースを併設し、珊瑚・シェルカメオをはじめジュエリー製造業全般の即戦力を輩出している。その一方、芸術大学、総合大学の建築学部や文化財マネジメント学部などへ進学し、ジュエリー以外の美術・芸術関連業界で活躍する卒業生も少なくない。その使命は開校直後のそれとは異なるにせよ、1995年に誕生したもう一校エミッディオ・メーレとともに、この町の珊瑚加工を脈々と継承し続けている。

1999年のナポリ大学経済学部の調査によると、この町の珊瑚関係企業は350社、直接・間接従事者は約5,000名、年間総売上高は1億7,000万ユーロ（うち74%は日本・アメリカ・ヨーロッパへの輸出）に上った。その後は世界的不況や宝飾市場の変化にともない、企業・従業者数の減少が続いている。だが一方で、宝飾業界全体が減速を余儀なくされた状況が、ハイエンドの客層が既成の価値観を超え、貴石や貴金属以外のジュエリーへの見識を深める機会となり、珊瑚の真価が正確に認識されつつあるという声もある。

●**シェルカメオ芸術の域まで** カメオとは、浅浮き彫りを意味する。ジュエリーにおいては、たとえ指輪のような限られたスペースでもその効果が引き立つよう、鮮やかな色の層のコントラストをもつシェルやメノウなどが多用されるが、カラットなど原料そのものもつ価値よりも、そこに施された彫刻に価値が置かれるという点で、ほかとは一線を画する。

このジュエリーの代表作は、ギリシャ・ローマ時代のものがほとんどである。現在のように精巧な研磨機や彫刻刀が存在しなかった当時、一つの作品を完成させるために費やされた時間と労力、その貴重性は現在とは比較できない。ルネッサンス期には、彼らが理想とした遠い過去の芸術の希少な実物として、計り知れない価値が見出された。その舞台となったフィレンツェのメディチ家宮廷を中心とした芸術作品の中に、カメオの全体または一部をモチーフとした絵画やメダル、建物の装飾、あるいは現存するカメオのオリジナルまたはコピーをまとった肖像画を、今でも容易に確認することができる。古の、または当時の傑作いにしえが教皇庁・王侯貴族間の贈り物として頻りに用いられていたことから、この頃のカメオの地位が推し量られよう。その後は古典主義時代、ギリシャ・ローマ期を愛したナポレオンにより、この時代を象徴するアイテムとしてブームが起こる。イタリアでは、カステッラーニを輩出したローマがその中心となり、グランド・ツアーでこの町を訪れた上流階級外国人が購入する必須アイテムの一つとなった。

現在シェルカメオに関して世界的な覇権を握っているのは、トッレ・デル・グレコであるが、その加工は、前述の珊瑚加工を基盤としている。珊瑚が大変貴重で、そのジュエリーには金のような高価な貴金属を必要としないとされていた頃、

原料の廃棄率を抑えつつ、その独特な色と形を最大限に生かすため、彫刻技術が発達した。真珠母貝やラーバなどに並び、この技術を応用できる、より廉価な素材の一つが、シェルだったのである。シェルカメオはトッレ・デル・グレコにおける珊瑚彫刻確立のいわば副産物として誕生したわけだが、この町は市場のニーズやファッションの変遷に合わせ、時に珊瑚を、時にシェルカメオを前面に押し出して前進し続けてきた。



サンゴ彫刻《海の怪獣に乗るキュービット》
アショーネ社

現在のカメオには、サインの入っているカメオと、入っていないカメオがある。前者は技術・芸術性が高く、またそれをより引き立てるため、原料もより優れたもの（色のコントラストがはっきりしたもの、デザインのインスピレーションを与えるような特徴的な起伏があるものなど）を用いる傾向が高い。一方後者は、原料・工賃とも廉価なのが一般的である。

サイン入りカメオの出現の理由には、珊瑚その他の貴石を多用した造形作家・画家カルロ・パルラーティ（1934-2003）が、その表現手段の延長として手がけたカメオにも、ほかの作品同様サインを入れたことをきっかけに、ほかのカメオ作家が倣ったという説（1970年代後半）、また顧客が優れた職人に対し、差別化のためサインを求める機会が増えた結果これが習慣となったという説（1980年代前半）などがある。当初サインは、顧客との直接取引をめざす職人による一種の業務妨害として、彼らを抱えるこの町の業者に警戒された。しかしシェルカメオは、原料がもつ価値が客観的かつ換金性の高いほかのジュエリーとは異なり、彫りというあくまで主観的な価値に真価を問われるアイテムである。カラットやブランド名で表せないその価値のギャランティにあたるサインは、優秀な職人であれば所属する業者にとってこのうえないマーケティング手段であることが明らかになるにつれ、逆に業者により積極的な導入が促されるようになった。また職人からは、市場と業者のいずれもから認められたことを意味するため、一つのステータスととらえられている。サイン入りを評価する市場は、芸術性の高いジュエリーとしてシェルカメオを求め、コスチュームジュエリーの素材またはお土産として認識する市場は、無記名のそれを要するというすみわけが存在している。

一介の漁師町から、加工技術で珊瑚業界を制覇したトッレ・デル・グレコ。その技を応用し、珊瑚とともにこの町を支える柱に成長したシェルカメオ。覇者の次なる一歩は、世界に比類ない加工技術と販売網を、いかに強い結晶とすることにかかっているのではないだろうか。

[鈴木庸子]